

涼しさ復活！ 秋の夜長に クロスロード新聞

2006年9月14日

発行元：108-8345 港区三田2-15-45
慶應義塾大学商学部 吉川肇子研究室内
クロスロードサポーター事務局

クロスロードファシリテータの集いが開催されます

ファシリテータのみなさんこんにちは。ことしもようやく涼しくなってきましたね。

さて、各地でのクロスロードの実践の報告は、毎号ご紹介しているところですが、このような皆様の日頃の実践に感謝し、このたび「クロスロードファシリテータの集い」を開催することになりました。11月に2回開催されます。日程および会場は右の通りとなっております。詳細プログラムは、クロスロードのウェブサイトおよび号外(11月初旬発行予定)でお知らせいたします。お楽しみに！

新聞で交流されている経験やファシリテータとしての工夫を、参加者のみなさんで分かち合いませんか？お申し込みは、クロスロードサポーター事務局まで。



第1回 東京会場

日時：2006年11月19日(日)

13:00~17:00

場所：

慶應義塾大学三田キャンパス

西校舎514教室

第2回 大阪会場

日時：2006年11月23日(祝)

13:30~17:00

場所：

千里朝日阪急ビル14階3号会議室

クロスロードいよいよ世界に進出！

クロスロードがいよいよ本格的に世界進出です。ことし10月19日~22日にドイツエッセン市で開催される国際ゲーム見本市(SPIEL'06)に出展が決まりました。この見本市は、世界最大のゲームの見本市で、4日間の開催期間中世界中から15万人の見学者が訪れます。

かねてからクロスロードはドイツ他のいくつかの地域で好評を得ていましたが、いよいよ世界の市場の反応を見ることになりました。英語版もドイツ語版も完成して、出展を待つばかりです。

会場ではクロスロードの実演コーナーも用意してありますので、見学者の評判もしっかり次号でご報告します。ご期待下さい。

新聞のバックナンバーが読めるようになりました

かねてからご要望が多かったクロスロード新聞のバックナンバーが、高知県危機管理課のご協力により、クロスロードのウェブサイトで見られるようになりました。

<http://maechan.net/crossroad/shinbun.html>

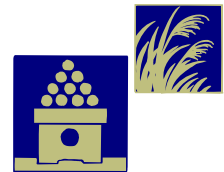
なお、新聞は閲覧はできますが、印刷をすることはできないようにしてあります。あしからずご了承下さい。

今後も、紙の新聞発行の約2週間後に掲載をしていく予定です。

高知県危機管理課のご厚意に改めて感謝申し上げます。

目次

ファシリテータの集いのお知らせ	1
世界に進出！	1
バックナンバーはこちらから	1
新作問題	2-3
進級者発表！	4
こんなところに心理学(7)	4
突然、モンモン族	4
レイテ島災害報告	5
ゲームで教える安全	6
ツァイガルニク効果	6



クロスロード次号のご案内
発行予定日：11.29.
クロスロードファシリテータの集いの速報！

責任編集

- チームクロスロード
- クロスロード・サポーター
- SPECIAL THANKS:
高知県危機管理課
小溝智子(漫画企画)

クロスロードの新しい問題をご紹介します

神戸編や一般編、災害時要援護者編などにつづき、今号では、投稿していただいたものを含めた新しい問題をご紹介します。これまでのものとあわせ、ご活用いただければ幸いです。

まずは、徳島大学環境防災研究センター 黒崎ひろみ様よりお送りいただきました徳島県版5問をご紹介します。問題作成のもととなった実話もお知らせ下さいましたので、あわせて掲載します。

問題1

・あなたは住民です

避難所生活3日目。トイレには汚物が山盛り！掃除をしなければいけないのは十分分かっているが、汚れるし、水が不足してお風呂にも入れない。誰も掃除する気配はなく、若手は自分だけである。

自分が汚れても掃除する → YES
見て見ぬふりをする → NO

実話：（阪神・淡路大震災のとき体験された方の話、男性）

当時、自分は20歳だった。家が全壊し避難所生活をしていて水が流れずトイレに汚物が山盛りになった。自分以外にも若手はいたが、トイレ掃除だけは皆が敬遠していた。どうしようもなくなり、自分が掃除しようと覚悟を決めて長靴をはいてトイレに入ってしまった。奥のほうまで入っていくと自分の膝より高いところまで汚物まみれになった。汚物をバケツに入れて外に運ぶとき、人様が生活しているところを通ったが、皆から「くさい」「こぼすなよ」と冷たい言葉をかけられた。最後までガマンしてやったが、風呂にも入れず自分は相当臭かった。これをきっかけに避難所では掃除当番が出来た。後々自分がまた避難所生活をするようになり、同様の場面に出くわしても、二度とトイレ掃除はしたくない。

問題2

・あなたは住民です

お風呂に一人で入っているとき、恐れていた南海地震が発生。家には自分以外だれもいない。お風呂のドアは揺れで開かず、近所で火事が起こったらしく、外では人が避難する声。津波も怖いし逃げたいが服はない。

恥ずかしくても逃げる → YES
やっぱり逃げられない → NO

*実話：（昭和南海地震体験者：男性）

漁から帰ってきて風呂に入っていた。揺れで慌てて出ようとしたがなぜか戸が開かず出られなかった。もちろん裸

であるし、真冬の早朝で寒いのでかなり躊躇したが、「津波がくるぞお〜！」の声に驚いてタオルだけ巻いて飛び出した。寒さは感じなかった。逃げているときに浴衣を貸してくれたが、浴衣を着たのは山に逃げ延びてからだった。寒さと怖さでガタガタふるえながら焚き火に皆であたった。津波にさらわれていく人の声がこだましていた。津波にのまれながら助かった人は服も何もあったもんじゃなく、ぐちゃぐちゃの状態で山に登ってきた。命がなくなるくらいならば、裸で逃げるほうがよっぽどまし。ただ（自分は男だが）女の人は裸では逃げられないかも知れない。これはわからない。

問題3

・あなたは夫婦2人暮らしです

平凡な一日が終わりぐっすり眠っていたときに恐れていた南海地震が発生。2分ほどの激震におそわれ家は全壊だが、自分はどうかはい出した。津波が来るので逃げようとしたときガレキの下から手が出てきて「助けて！！」と愛する妻（夫）の声が。引っ張り出そうにも出てこない。津波の先端が見え、すぐ逃げなければ自分も死んでしまう。

見捨てて逃げる → YES
助けて一緒に死ぬ → NO

実話1：（阪神・淡路大震災体験者：男性）

（震災直後のインタビューより「人と防災未来センター」で聞いた体験談）息子が下敷きになった。足がでいたのでひっぱったが出てこなかった。火の手が回ってきて息子が「もうええわ」と言った。もう生きてないと思う。

実話2：（阪神・淡路大震災体験者：女性）

（「人と防災未来センター」の映像より）姉が下敷きになった。助けようと両親とがんばったが無理だった。火の手が回ってきて姉が「もうええから逃げて」と言った。両親は気が狂ったように泣き叫びながら逃げていた。

実話3：（昭和南海地震：女性）

生まれたばかりの赤ん坊を背負って逃げるのが精一杯だった。両親の声が聞こえた。断末魔のような声が忘れられない。

実話4：（昭和南海地震：男性）

家内が家の中のものを取りに行った。津波が高くなってガウをたくさん連れてきた。家の中はガウだらけだった。家内を呼ぶと「助けて」と言われたが自分にはどうすることもできなかった。結局自分だけ逃げた。

問題4

・あなたは漁業者です
夕食後のひととき。ゆらゆらと船が揺れるような揺れが2分～3分続きました。南海地震なら津波到達時間は揺れははじめから5分と聞いている。すぐに逃げなければならないが自分は船着き場から100mくらいのところに住んでいる。

船に乗って沖に逃げる → YES
船を見捨てて山に逃げる → NO

実話：（昭和南海地震：男性）

船に乗ったような揺れでそれほど大きくなかったと思う。揺れは数分続いたように思った。自分は漁師だったので船が気になり沖に向かって走ったが潮が引いていたのか遠く感じた。先に沖へ向かった人が「津波がきたぞ〜！」と言い、あわてて山へ走った。津波にはすぐに追いつかれ、気が付いたら目の前に流れていた屋根に上っていた。山の裾野まで流されて避難していた人に引っ張り上げてもらった。流されているときに「助けてくれ」と後ろから聞こえてきたが、自分にはどうすることもできなかった。教訓として「地震が来たらすぐにげる」と伝えたい。

新型インフルエンザの備えは？

続いて感染症編をご紹介します。感染症編作成にあたっては、熊本県健康危機管理課、順天堂大学医学部公衆衛生学教室他のご指導を得ました。感謝申しあげます。

新型インフルエンザが発生すると、どのような事態が生じるか、正確に予測するのは困難ですが、未だに誰もかかったことがないインフルエンザ(新型)であることから、感染の拡大が懸念されています。そこで問題になるのが、患者(あるいは疑わしい患者)が出たときの情報の公開をどこまでするのかということ(8003)。住民の立場からすると、患者さんの居住地がわかった方が、自分の感染の予防という視点からは望ましいのですが、かといって詳しく居住地を公表すると、患者さんの名前がわかってしまったり、また差別などの問題が生じるかも知れません。同じようなシナリオは、SARS患者が日本に旅行した時や大阪堺市のO157患者の発生の際にも起こりました。どういう情報の提供の仕方なら了解してもらえるのか、今のうちから考えておくことが重要ですね。

また、患者が発生した後、大規模な集会を開くかどうか議論になりそうです(8027)。兄弟問題として、市民の立場からは、多くの人が集まりそうなショッピングセンターへいくかどうか?という問題もあります。いくら感染が怖いといっても、買いものを

問題5

・あなたは海水浴客です
夏休み最後の日曜日。海水浴を楽しんでいる。友達(家族)と海岸から50m程度先まで泳いで行ったが疲れたので自分だけ海岸に戻った。そのときゆっくりだが長い揺れ(震度2～3程度)を感じた。他の海水浴客も何人かが気が付いたようだが避難する様子はなく、自分の友人(家族)は誰も気づいておらず海の中。

自分だけ高台へ急いで逃げる → YES
皆を呼びに海へ向かって泳ぎ出す → NO

実話：（スマトラ沖地震津波体験者：男性）

揺れたと思うが自分は海に入っていたのでわからない。海岸に上がると「地震があった」と教えてくれた。津波のことは知らなかったので逃げようとは思わなかったし誰も逃げていないので何も考えていなかった。沖が膨らんでいたが高波が来たようにしか見えなかった。近くまで津波が来て人が慌てて逃げているのに飲み込まれているのを見てはじめて「とんでもない波がきた」と分かった。夢中で逃げたが津波に追いつかれた。悲鳴が聞こえたが怖くて振り返らなかった。自分は助かったがたくさんの人が死んでしまったと思う。

Decision tree for publicizing information about a new influenza case. It asks whether to publicize the location and whether to cancel a concert. Options include Yes/No and OR.

しなければ日常生活は成り立ちません。どうしたらいいでしょうか?ご家庭でもぜひ考えてみてください。

今後は、感染症編を使って実施した研修の報告も掲載していく予定です。

さらに、東海地震編、子ども編、火山編も制作が進んでいます。順次ご紹介していきますので、どうぞご期待下さい。



新たに進級された方

以下の方からクロスロードの実践報告および新作問題をお送りいただきました。報告に改めて御礼申し上げます。(敬称略)

新作問題の投稿もお待ちしております。

【中級】徳島大学環境防災研究センター 黒崎 ひろみ

【上級】徳島大学環境防災研究センター 黒崎 ひろみ

【応募先】108-8345 港区三田2-15-45
慶應義塾大学商学部 吉川肇子研究室内
クロスロードサポーター事務局
電話：06-5427-1251
ファックス：03-5427-1578
メール：kikkawa@aoni.waseda.jp

電子投稿はこちら↓

<http://maechan.net/crossroad/toukou.html>

こんなところに心理学(7)：クロスロードモンモン族の勧め

クロスロード新聞発刊準備号のマンガを覚えていらっしゃいますか？「クロスロードの●●族」の中に、帰りで「結局イエスカノーか答えが出ん！」とするモンモン族がいましたよね。実はこのモンモン族、とっても大事なことを意味しているんです。

心理学に「ツァイガルニク効果」といわれている現象があります。例によってカタカナでごめんなさい。ツァイガルニク(Zeigarnik)は人の名前(昔のロシア、現在のラトビア出身の心理学者)です。

ツァイガルニクは、記憶の研究をしている途上で、人々が、やり終えた課題よりも、途中でやめた課題の方を、よりよく覚えていることを発見しました。仕事に置き換えるなら、やり終えた仕事のことは忘れてしまいが、やりかけたままの仕事はいつまでも気になる、ということでしょうか。

なぜこのようなことが起こるのかは、次のように説明されています。人は何かをするときには、ある程度緊張してやっているわけですが、それをやり終えると緊張が解消するのです。しかし、目標が達成されていない、す



なわち、片付けていないやりかけの仕事は、この緊張が解消されないので、いつまでも記憶に残っているというのです。

イエスカノーか考えれば考えるほど、はっきりしないクロスロード、なんだかおさまりが悪くていやだなあと思われる方もあるでしょう。でも、こうやっていつまでも考え続けることが、防災には必要なのではないのでしょうか。災害対応はこうすればいいんだ、と腑に落ちて納得することも重要ですし、それがなければ計画を立てられないというのも本当です。しかし、いつも起こるわけではない、また自分の身に必ず降りかかるとも限らない災害のことを考え続けるためには、時に納得しないままで、その問題をとっておくとも重要だと思っていただきたいのです。解決がわかったら、そこで人は考えることをやめてしまいます。腑に落ちすぎると忘れてしまうことが人間にはあるのです。

考え続けることをやめない大切さ、クロスロードのモンモン族は、それを教えてくれている気がします。

突然、モンモン族

◎やなせたかし

突然、モンモン族	1 クロスロードのカードに、 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">地震から数時間。 避難者が3,000人。 食料2,000人分確保 できたが、 配る？配らない？</div> というジレンマ問題がある。	2 高知県では、「配る！」が 多数派を占めていた。 <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"><div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">配るぞ YES</div><div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">分けて配れば いい。 年寄り から YES</div><div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">YES</div></div>	3 しかし、 平成16年10月23日、新潟 県中越地震のニュースでは <div style="display: flex; align-items: center;"><div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-right: 10px;">全員分 そろそろ まで、 配りま せん</div></div>	4 地域住民同士が親密なので、そろわ ないと配らないことを選択したとか。 <div style="text-align: center;"></div> オニギリモ、チイサケテ、ワケニクソウ ダナ 果たして、南海地震の時、どうすべきか ・・・なんだか少し分からなくなった。
----------	--	--	--	--

災害調査報告です：フィリピン・レイテ島の地滑り災害

日本だけではない自然災害。矢守先生からレイテ島（フィリピン）の地滑り災害の報告です。

フィリピンについては、地震や火山などの自然災害もあり、また他の災害についてフィリピンの人たちが作ったクロスロード問題もあります。これらについても次号以降でご紹介します。

今年（2006年）の2月17日、午前10時30分頃、フィリピンのレイテ島（首都マニラなどが位置するルソン島の南の島）で、大規模な地滑り災害が発生しました。地滑りは、ギンサウゴン・バランガイ（バランガイは、フィリピンの地方行政の単位）と呼ばれる村の後背部に位置する山で発生しました。総量1500万立方メートルもの土砂によって、村のほぼ全域（約300ヘクタール）が最深で30メートルもの土砂で覆われました（写真1と写真2）。この結果、この同バランガイの住民（1860人）を中心に死者154人、行方不明者が972人にのぼる大惨事となりました。行方不明の方が多いのは、分厚い堆積土砂のためご遺体の収

容が困難だったためです。

筆者は、災害から約1ヶ月を経た今年3月末研究室の仲間とこの災害の現地調査に向かいました。その詳細については、「自然災害科学」（25巻1号）という雑誌（<http://www.soc.nii.ac.jp/jsnds/>）に報告しましたので、ここでは、印象に残ったことを2点ほどメモとして書き留めておきたいと思います。

第1に、災害の原因についてです。この地滑りには、同地が地滑り多発地帯であることに加え、数週間にわたって大雨が降ったこと、地滑りの直前に地震が発生したこと、および、避難が遅れたこと（避難の勧告は出されていたにもかかわらず、農地などを気にする住民の多くが自宅周辺に戻っていました）、少なくとも、この4つの要素が関与しています。さらに、山地での樹木の伐採が間接的に悪影響を及ぼしたと考える人もいます。つまり、この災害は、典型的な複合災害だったわけです。災害対策が進めば、個々の要素に起因する災害の発生はある程度封じ込めることが可能ですが、多くの要素が絡むと大規模な災害につながります。各箇撃破という言葉がありますが、災いの芽は、個々バラバラで手に負える間に摘んで置くことが大切だと感じました。

第2に、災害後建設された仮設住宅（写真3；現地調査当時は、整地が終わった段階）について、少なくとも、その一部が、入居する住民自らが選定した土地に建設されていた点が印象的でした。その土地は、移転を余儀なくされた人びとが、もともと耕作していた農地に徒歩で通うことができるという観点で選定され、併せて、行政が、地滑りその他の災害に対する同地の安全性を確認していました。

もちろん、日本の都市部とは異なって、それだけの空間が近くに存在していたことで可能になったことではありません。が、農地を失った被災者に対する職業訓練が地元のNGOの手によって長期的な視点に立って実施されていたことも併せて考えると、被災者の生活復興支援という観点で、私たちが学ぶべきことも多いと感じた次第です。



写真1



写真2



写真3

ゲームで教える安全：ドイツ編

ドイツは、1面でも紹介したように、世界最大のゲーム見本市が開かれるほどのアナログゲーム(ボードゲームやカードゲーム)の大国です。ボードゲームだけでも年間数百の新作が作られるといわれています。右の写真4をご覧ください。これは、ミュンヘンの本屋さんを写したのですが、このように普通の本屋さんにもゲームが沢山並べられています。



写真4

こういうお国柄ですから、子どもたちに安全を教えるために、ゲームがよく利用されています。特に、交通安全を教えるためのゲームは、種類が豊富です。ドイツの子どもたちは自転車によく乗りますから、交通標識や交通ルールだけでなく、自転車のメンテナンス(タイヤのパンクの直し方、ブレーキのチェック)まで教えるものがあります。下の写真5に写っている2つのゲームはその例です。

右下の写真6は、もっと一般的に安全を教えるためのものです。子どもがよくやりそうな危ないことがカードになっていて「危ないよ」と書いてあります。ここでは4枚を挙げましたが、それぞれどんな危険を教えているかわかりでしょうか?ルールは神経衰弱のような簡単なものですから、小さい子どもでも楽しく遊んで学ぶことができます。



写真5



写真6

覚えてますか? ツァイガルニク効果

◎やなせたかし

